コール・アカデミー合唱団

合唱団誕生の頃

大正14卒　瀬　名　貞　利

私が高等学校の生徒の頃は東大には音楽部がなかった。一高では校友会の中には，音楽部は無かったが，一高楽友会という団体があり男声合唱をやっていた。といっても学校の中に練習する部屋がなく，小人数なのを幸い，合唱の指揮をして下さる弘田竜太郎先生のお宅に押掛けて御指導を受けた訳である。処が兄貴分の東大は音楽が嫌いで（その頃の大学教授連には「日本音楽は卑俗なもので西洋音楽は分らないから」というような考えの人がいて，大学の中に音楽などを入れる必要はないと考えていたらしい。）大正９年に先輩の御尽力で初めて管弦楽団が生れるまでは，大学構内では国歌以外は歌も唱えなかった。音楽美学の故兼常清佐博士は曰く，「東大の中はいつも諒闇で歌舞音曲停止だ。」と。全くその通りであった。それだから法学部の渡辺鎮蔵教授等と，学生では岸偉一君，馬場檜吉君等の御尽力で音楽部が大正９年に創設された事は大きな功績であり，学生も先輩も皆喜んだ。管弦楽の指揮には元海軍軍楽隊の指揮者で，「軍艦マーチ」の作曲者として有名な瀬戸口藤吉先生を迎えて花々しく出発し，そのメムバーには渡辺教授や経済学部のベルリナア先生も参加されて第一バイオリンを弾かれたが，その年はまだ合唱団は生れなかった。

合唱団の方は大正11年の春に漸く誕生した。指揮者は東京音楽学校教授の沢崎定之先生で大変良い指揮者が得られた訳である。私の高校時代の声楽の先生は水野康孝先生で，実に美しい――日本人には珍らしい声の持主だったが，沢崎先生はずっと先輩で経験の深い音楽家だった。その頃学生で男声合唱をやれるのは幸せな方だが，私は欲張りで混声合唱をやりたいと思ったが，まだ男女の交際のやかましい時代で誰でも入れる合唱団は全然無かった。然しクリスマスの頃になると方々の教会で急造の混声合唱団ができ，各パアトに専門家を入れて（それも主にソプラノ）普通の讃美歌集にある曲より高級な聖歌曲をやることがある。それを知ると早速もぐりこんで方々の教会で唱ったから，その方で沢崎先生とは面識があった。その先生が来られて熱心に指揮されるのだから私も熱心に一度も休まず練習に参加した。その時のメンバーは多分三十数人だったかと思う。それだけに先生の御指導も細い点に立入って親切に教えて下さったが，非常に厳しかった。後で判った事だがその時の先生の報酬は大変安く，剣道・柔道の師範と同格の待遇なので年俸といっても月収数ケ月分に過ぎず，世間知らずのわれわれ学生も驚いたり恐縮したりした。然し沢崎先生は「いや，俸給より東大から辞令を貰って嬉しかったよ。」と笑っておられた。一体男声合唱はテナア二部，バス二部の四重唱だから簡単なものだが，それだけに各パアトにミスや雑音が出ると忽ちバレてしまうから，呼吸の仕方，吸気の切り方はもちろん，各人の音程や発声までやかましく注意された。近頃のテレビでは喜ばれているらしい，明るいが平べったい発声は一番叱られた。そんな声で唱う奴があると「あなた一寸ひとりで唱って見て下さい。」練習最中に一人立たされて唱わされる。「あ！その発声は大変困ります。口を横に開かないで縦に開いて，そうそう，そうすれば丸い声が出ます。平たい声は他の人とハーモニイしませんから合唱の時は大変困ります。」という調子でビシビシ注意されるから気の弱い奴は一度で懲りてもう出て来なくなる。メンバーが減っても変な声を出す奴はいない方が好いという先生の方針はわれわれも次第に判って来た。

第一回の演奏会は確か大正11年の12月だったと記憶しているが，大学講内で適当な会場がないので神田美土代町のＹＭＣＡのホールを使った。あまり綺麗でないホールだが大勢入場できるのが利点だった。（これは大正12年の関東大震災の時焼けたと思う。）その時はもちろん管弦楽も同時に演奏したが，できたてのコーラスではオーケストラ伴奏などは望めなかった。合唱は２回で，無伴奏の歌三曲とピアノ伴奏で，ベートーベンの「自然における神の栄光」を唱った。アカペラの方は民謡が多くロシアの「ボルガの舟歌」とノルウェイの「ヤヴィエルスケル」それからウエッテルリンク（スウェーデンの作曲家）の「セレナード」を皆原語で唱った処，聴衆の受けは大変好く，殊にボルガの舟歌はエクスプレッションも巧かったのでアンコールされて団員一同感激した。いうまでもなくこれは沢崎先生の御薫陶の賜である。ベートーベンの曲も評判は好かったが，音楽部の中での評判はあまり好くない。「第一，曲がつまらない。」「ベートーベンの曲を選んだのは好いとして，あれは独唱曲で合

唱の曲ではない。」などと，一般の評判が良かっただけに部内の風当りは強い。然し批判されることはよい薬になり，その後の選曲は十分注意するようになった。沢崎先生も苦心してよい曲を集められ，ブラームスの独乙民謡やグリーヒやシューベルトが男声合唱のために作曲した物を教えて下さった。これらの楽譜や演奏会のプログラムは全部大切に保管していたが昭和20年5月の戦災で皆灰になってしまった。それで第二回，三回の演奏会で何を唱ったか覚えていないが，第四回の時は合唱も管弦楽も皆ベートーベンの曲を選んで「ベートーベン祭」とした。合唱曲の無伴奏のものははっきり覚えていないが，三部合唱の「アプシード・ゲザング」は案外難しい曲だったが名曲で，未だにメロディは覚えている。又管弦楽の伴奏で歌劇「フィデリオ」の囚人の合唱をやり大変勉強になった。この時はメンバーを増強し，特に沢崎先生のお声がかりで長井維理氏と斎藤斉君に参加して貰った。それまで斎藤君とはあまり口も利かなかったが，この時以来非常な親友となり，卒業してからもOBの小グループの合唱団をつくり，毎週斎藤家で練習し，昭和30年頃まで時々ステージに出たが，今は故人になった人が多い。然し今でも沢崎先生の御指導ぶり，指揮の時のお顔は眼底に残っている。（東京農大教授）

東大合唱団の思い出

昭和7卒　坂　本　吉　勝

私は大正13年に一高へ入って早速音楽部員となり，瀬名貞利先輩の指導で男声合唱を練習した。次いで瀬名さんのすすめもあって東大合唱団の練習に参加し，同年6月の第7回演奏会（於法文経30番教室）から出演させて貰った。当時の東大音楽部のメンバーはオーケストラも合唱もなかなか優秀な人達ばかりで毎回の練習もきびしかった。合唱の指導は当時音楽学校の教授沢崎定之氏でオケも合唱も気狂いのように熱心なメンバーが中核となっていて実に楽しい雰囲気が溢れていたので毎週の練習日が待ち遠しい位で，それに巧みに指導して下さった沢崎先生には多大の尊敬と懐かしみを覚えた。同年秋の京都で行われた東西両帝大合同演奏会には大勢の先輩と京都まで遠征し華やかな演奏会を持つことができたことは今でも忘れられない思出である。

その当時からずっと戦後まで続いたことではあるが，故長井維理氏と故斎藤斉氏とは二本の柱であり，それに瀬名，椎葉などの優秀な先輩が加わって誠にけんらんたる男声合唱が唱われたが，これらの先輩のおかげで私達は安心してハーモニーを楽しむことができた。合唱曲の傾向といえば戦前私達が唱った曲は殆んど独乙の合唱曲殊にロマン派の作曲家のものが多く，歌詞も独乙語が圧倒的であった。又私達は殆んどピアノ等の伴奏を用いないア・カ・ペラのものを唱った。毎年東大の演奏会というのは初夏の頃と秋と2回であったけれど時には冬に1回又は記念のための演奏会も加わって4回に及ぶこともあった。

初夏の薫んばしい青葉の下をくぐり，寒い西風の強く吹く夕映の空を仰いで練習に行き来した夢多い青年の日をその景色と共に今でも思い出すことができる。長らく合唱の棒を振って下さった沢崎先生は健康を害され昭和10年頃から音楽学校助教授の伊藤武雄氏がこれに代られ，後に戦争が苛烈となって出征されるまで伊藤先生の指導が続いたが，先生は沢崎先生のやり方をよくうけつがれ東大の人達に適切な雰囲気をつくるように努力せられた。

昭和12年の演奏会からか，メンバーの一人繁田裕司氏が編曲してくれた「唄声ひびく野に山に」のカノンは，巧みな斎藤氏のリードによって聴衆とオケ，合唱全員の大合唱に成功し，当時としては珍らしく演奏者と聴衆とが互に心を通わせ合って三重唱を唱うという慣習ができた。これはいつも東大の演奏会といえば来てくれる常連の人達に大変よろこばれ，その後毎回の演奏会はこの合唱によって幕を閉ぢるようになった。この「美わし春よ」の合唱を解説付きで聴衆に唱わせる斎藤先輩の人気は演奏会毎に高まったがこの斎藤さんの人気の根元にはもう一つ演奏会での大失敗があった。昭和12年の秋の定期演奏会のプログラムの一つにシベリウスの「フィンランディア」があった。大編成のオーケストラ曲であったのでオケのメンバーだけでは足りず，合唱部の幾人かは打楽器などを受け持たされた。もちろん臨時雇なので，あまり練習をする間もなく本番となった。斎藤さんは「よし大太鼓とシンバルは俺がやろう」と引受け，ひな段の最上段の席についた。当時燕尾服を着て演奏会に出るメンバーは殆んどなく，斎藤さんの燕尾服姿は一段と冴えていた。初めの静かな曲から次第に起伏の多い調べとなり，音もピアノからフオルテに拡がり，金属管が次第に数を増してやがてティンパニーの連打，大太鼓，シンバルの絶叫になる辺りで斎藤さんはしきりと神経質なそぶりをしだした。ホルン，トランペットなどがフォルテで勇壮なスタッカットのフレーズを刻み出す頃から斎藤さんのパートが出る用意をしなければならないのに，しきりと左右の人の譜などを不安そうに見てやがて両手にシ

ンバルを高く上げ指揮者の棒の合図を待っていたがどこで出たらよいかわからず，何遍かシンバルを打ち合せようとして止めてしまうという始末，そこへすぐ大太鼓を打ち鳴らすべき場所が来たのでシンバルを傍の椅子に手早くおいてバチを取り上げ大太鼓をピアノからフォルテにドドドドドと打ちつづけて行くとひな段の床がそのひびきでゆれたため椅子の上においたシンバルが二つ椅子から転げ落ちて一段低い前の方にドシン，ヂャカーンと大音響。楽員は夢中で演奏していたのであまり気がつかなかったが先刻から斎藤さんの動きを見て少々クスクスやっていた聴衆一同もう我慢ができず会場は一瞬大爆笑。とうとうそれから後の曲はしどろもどろになって終る始末。しかし曲が終るや否や再び会場は笑いのるつぼと化し拍手大喝采で何ともいえぬ和気あいあいの空気が充ちたが，それと比べて斎藤さんの穴にも入りたき風情の顔は今に忘れ得ないものであった。

昭和15年頃までは時局もそれほどきびしくはなく，音楽部のメンバーも別に時局には影響されずやりたい曲を楽しく練習し演奏を楽しんで来たが昭和15年の演奏会になるとシュトラウスのワルツ「酒・女・唄」はプログラムには円舞曲作品333とだけ記して時局へのはばかりを示すようになった。私は同年から戦時召集をうけ，中国及び南方戦線に満3年間出征してしまったので，東大合唱団がどんな活動をしていたか知る由もなかった。

東大合唱団プロパーのメンバーによる合唱と共に合唱団を支え強い影響を及ぼしたのは長井，斎藤を中核とする卒業生による東大ＯＢ合唱団の活躍であり，ＯＢはいつもプロパーの部員と一緒に音楽部の練習にも出，演奏会にも出演した。時にはＯＢ合唱として番外出演をしたこともあった。

序でにＯＢ合唱団のことを少し書いておきたい。ＯＢ合唱団は昭和８，９年頃やはり長井，斎藤の両氏を中心として交互にそのお宅に集まって毎週１回練習した。その曲は殆んど独乙のもので殊にブラームスの独乙民謡などが多かったが，メンバーは東大合唱団の先輩で東京在住の熱心な人達から構成され多いときは20人を超え，当時まだ少なかった一般の合唱団に比べると相当レベルの高いものであったと思われる。メンバーにはいろいろな仕事に活動している人がいて合唱の都度集まって話し合う楽しさはこの合唱団の大きな魅力であった。メンバーはだんだん深まる戦局を憂慮しながらも美しい音楽へのあこがれを戦争などのために破壊されないよう，いよいよ団結して人々の間に美しい調べの心をたやさないように努力しようと申し合せた。

私は昭和18年に南方戦線から一度帰還したがその直後にあった定期演奏会で私がインドネシヤで覚えて来た民謡二曲を長井氏が男声四重唱の伴奏をつけて下さってソロで唱ったことがあった。まだインドネシヤの民謡はその頃は珍らしかったようであった。この当時のプログラムにはさすがに戦局を反映して軍歌集とか軍歌調の合唱曲が唱われている。

その後は又出征，終戦そして帰国。終戦後東大音楽部は早くも活動を始めその後のことは比較的多くの人々の記憶に新たなことであろう。戦後音楽は日本全国で盛んとなり合唱も想像もできなかった位隆盛な今日を招いた訳だが，どうも専ら技術をみがき巧さを比べることに偏重しているような気がしてならない。メンバーの人的交流をたっとび，その雰囲気を楽しむという傾向は合唱団の発達という点ではあるいは正統ではないかも知れないがそのよさはやはりプロ的合唱団には到底得られないある物があると思う。私達は若い日から今日までそのような美しい楽しい合唱を続けて来た。そこにこそほんとうの文化の高い匂いが育てられて行くのだと考えるのは独りよがりであろうか。

（弁護士　湯浅・坂本法律事務所）

エピソードなど

昭和15卒　穂坂直弘

私が音楽部合唱団の現役であったのは昭和13・14年の頃で，それまで古い部室（医学部近くにあった第三控室の一部）から新しい第二食堂の現部室に移ったばかり，オケ・コールともに質も量も誇るに足ると大いに自負していた時代であった。また，両者の連繋が密接であったことは特筆に値すると思う。録音や慰問などに力を併せたのはもちろん，部室でもよくいっしよになっていろいろな音を出していた。

この“優秀なる”コールがとんでもない失敗をしたことがある。昭和13年秋の定演が恒例の如く外苑の日本青年館で催されたとき，オケ伴は，フィデリオ「囚人の合唱」，テナーソロは輝やける斎藤大先輩。この日，例年に増しての超満員で，はいりすぎて消防署からお叱りを受け，開幕直前小生は責任者として名刺を取られる始末。無料公開だから大目に見てやるが事故を起したらちよっと来て貰うというわけ。堀内委員長に「君，えらいものを取られたなあ」とおどされながらステージに駈け上る。この頃斎藤大先輩はソロを聞かすべく引連れた御家族等ともどもやや定刻に遅れて正面玄関に駈けつけた

が，消防署におどかされた受付学生一同，誰が何と言おうと固く扉を鎖してこのソリストをも断じて入れない。巨漢カンカンになって扉を叩いているうちに幕は上り，現役三年の堀内(淳)君の代演で無事に演奏は終ってしまった。この夜浜崎先輩は軍服で駈せ参じて居られたと思う。いわゆる日支事変が拡がりつつあった頃で，コールの指揮者伊藤武雄先生は上海で戦傷を受けて帰られ，このステージから隻手の指揮者として大戦中期まで指導を続けて下さった。すこぶる学生気分を愛して下さる先生で，われわれとダベリつつお茶の水まで歩くのは毎度のこと，よく三丁目の角の明菓で全員にコーヒーを御馳走して下さったり，今考えると恐縮至極ながら，そのときはずい分嬉しかったものである。

伊藤先生が出征をして入院していられる時期と思うが，柴田陸睦先生・橋本秀次先生にも来て頂いたことがある。のちにテナーの第一人者となられる柴田ボクボク先生，もちろんいまだ若く，「何だかえらく元気のいい先生が来たぞ，ピアノをガンガン叩きながらテナーをいっしよに歌ってるうちに，そのまま立ち上っちやうんだからな」という評判であった。

大戦末期から十年近く現役コールの指導は薗田誠一先生となったが，昭和23年頃，当時の若手ＯＢが集って，ＹＯＢ合唱団なるものをつくり，音楽部室を本拠として再び伊藤先生に見て頂くことになった。Ｙは Younger の意で，長井維理邸で続けられていた「ＯＢコア」通称大ＯＢは御本家として崇め置き，これとパラに学内団体として暴れようというものであった。熱心な数名は先生宅に個人レッスンを受けに行き，「あなたは喉に何かつまってるんではないですか」と，ライトで口の中を覗き込まれたりしながら発声練習をした。その甲斐あってか24年（？）秋の合唱コンクールでは男声の部で優勝（綜合２位）し，銀盃を持返って現役コールを大いに刺戟することができた。

この頃，伊藤先生は邦訳歌詞の質の向上に努めて居られ，次々に名訳を発表していられた。われわれも Long long ago（想い出），Home sweet home，Auld lang syne など次々に歌い楽しんでいた。印象に残るのは，赤門前のタムラである晩，「今こんなのを作りかけているんですがね」と Coming through the rye を口ずさんで下さったことである。あのＣまで響く低いバスで，物語るように「誰かが誰かと麦畑で，こっそりキスした，いいじゃないの」と歌い出された。その頃はまだ暗かった電灯と古い石炭ストーブと，そして歌につれて静かに動く先生の左手が忘れられない。この歌詞はわれわれが初演した。

やがて，その頃の現役が，またもっと若いＯＢとなったとき，大ＯＢとＹＯＢとこの最も若いＯＢが合同して東大ＯＢを名乗ることとなり，薗田先生が新しい指導者となって今日に至っている。薗田先生独得の短い指揮棒がグット下り，パッと上るとき，われわれは自然と息を吸い込まされ，声を引張り出される思いがして，小さな棒の力に驚いたものである。先生がうちでビールパーティをやろうと言って下さるのに飛びついて二晩つづけて皆で押掛けたことなど，20年近く経ったいま，頭を掻き掻き懐しむ思い出はつきない。

（東洋理化工学技師長）

戦　争　末　期

昭和20卒　菊　池　正　一

外苑の日本青年館での恒例の定期演奏会ができなくなり，五月祭もとりやめとなり，学徒出陣で合唱団のメンバーがつぎつぎと去っていき，幹事の仕事を托する人もいないままぼく自身海軍に入り，そして８月15日を迎えた―というのが記憶にある当時の東京帝国大学音楽部合唱団の終りの頃のあらすじである。

戦争中だからといって，また戦争が激しさを加えてきたからといって，ぼくらの練習する曲目は本質的にさほど以前と大きくは変らなかったように思う。ただいくつかの信時潔作曲のものが加わった。戦争直後この人にはその作品が国粋的なものに傾き，時局便乗的であったという批判もあったようだが，あの格調高い作風には独特の魅力があり，演奏会でうたった１，２の曲はいまでもつよい印象がのこっている。

Ｂ29の東京空襲がいよいよ本格化したころだった。当時音楽部長の颯田琴次先生と話しをしていたら，

「きみ，新響（Ｎ響の前身）の演奏会にいかないか。招待状があるから。」

ということで，ぼくはもちろん喜んで頂戴した。その日の夕方小川町から大手町，日比谷方面へいく都電にのって日比谷公会堂に向ったまではよかったのだが，神田橋の辺で今日あたりヒョッとするという予感が的中してしまい，空襲警報が鳴って電車はとまり，乗客はおろされてしまう始末。もちろん音楽会はダメにきまっている。何とか国電の駅までたどりつき，電車が走れば家に帰ろうと思ったのだが，あたり一面焼野原でもううす暗くなってはくるし，神田か東京の駅がそう遠くないところにある筈と思っても全然見当がつかない。めくら滅法

に歩きながら，もうこんな焼跡に爆弾はおとさないだろうと思ってみたり，もしも爆撃をうけたらどこにかくれようかと不安になったり，とにかく東京のド真中でこんな心細い思いをしたことはない。やっと動きはじめた国電で家の近くの駅におりたらまた空襲。高射砲のとどろく中を家々の軒下を伝って走って帰宅し，ホッとしたのを覚えている。音楽会一つきくのも楽ではなかった。

部員がだんだんと減っていって，もうまともな練習などできなくなっていた。それでもやはりうたいハモるのをすっかりやめてしまうのではあまりにも淋しいというわけで，医学部や理学部の残った連中に，あちこちの研究室に勤めているお嬢さんたちを加えて混声合唱なども試みた。これなら男声四部には一寸ムリな顔ぶれでもかっこうはつけ易いというものだ。工学部の小さな空き室などに集ってよくうたったものだった。

窓の外では火薬の実験でもやっていたのかドーンドーンという爆発音がときどき窓ガラスをふるわせてひびいていた。

幹事として合唱団の事務を分担していた最後の人たちも戦争に出ていくことになった。一晩ぼくの家に当山敬男君，星田守君らが集ってお別れの会をひらいた。わずかな酒をのみ，語り，そしてうたって帰って行った。およそ合唱団というものが成立つためのあらゆる条件が一つ一つこわれて行く中で，何とかもちこたえようと努力してきた仲間たちもとうとう去ってしまう。最後の一人になったぼく自身だってあとしばらくでいかなければならない。日本青年館や安田講堂のステージでのあのハーモニーの中に，われわれの何人が再び生きのこって浸ることができるだろうか。最期をみとる者に似た感慨があった。

こうして戦前の東京帝国大学音楽部合唱団は一たん消えたかたちになっている。しかし終戦後学内にサークル的合唱団が続々結成され，活発な活動をはじめたのであるが，そのうちの「白ばら合唱団」の男声メンバーが主力となり，その他の合唱団の有力メンバーも加わって，新たに東大のいわば正統の合唱団が成立したのが今日のコールアカデミーである。（順天堂大学教授）

第2次世界大戦中の東大音楽部合唱団の崩壊と，終戦直後のその再建の回想

昭和21卒　菊　池　維　城

本年（1970）年は東大音楽部の設立50周年に当るが，私が在学したのは，今より28年前の昭和17年（1942年）から昭和21年9月までであり，その期間を通じて入学から卒業まで，音楽部合唱団に在籍した。従って第2次大戦中及び終戦直後の最も動揺と転変の激しかった混乱期の東大音楽部合唱団の歩みを見守って来た。殊に，昭和20年9月から翌21年8月までの1年間は戦後の再建を担当した委員として，その想い出も感慨深いものがある。当時10数名しかいなかった東京帝国大学音楽部合唱団（通称東大合唱団）も，現在では100名近いメンバーを擁する大合唱団に成長し，その名も「東大コール・アカデミー」と改められて国内ではもちろん，ドイツ，オーストリアまでも演奏旅行を行う程の発展ぶりを，今から25年前の終戦当時に誰が想像することができたであろうか。その相違の大きさを見るとき，転た今昔の感がある。今ここに，50周年を迎えるに当り往時を回想してみたいと思う。

I．戦時中の東大合唱団の活動と崩壊

私が入学した頃（昭和17年）は戦時中といっても，未だ太平洋戦争の開戦直後であり，真珠湾攻撃の成功やマレー沖海戦の大勝利など，わが国の優勢な時代であったから，音楽部の合唱団及び管弦楽団の活動にも殆ど戦争の影響は見られなかった。当時は合唱団（コーア）と管弦楽団(オケラ)と合同で，毎年春秋2回の音楽部定期演奏会を神宮外苑の日本青年館で開催した。コーアの指揮は伊藤武雄先生，オケラの指揮は長井維理先生，音楽部長は医学部の颯田琴次教授であった。当時は定期演奏会の終りに恒例番外として“Wie schön”――歌声ひびく野に山に――を会場の聴衆と共に，ステージではコーアがオケ伴で歌って散会することになっていた。この曲の優れた編曲は当時オケラのメンバーの繁田裕司氏であるが，同氏は別名三木鶏郎として有名である。又この曲は聴衆全員と共に歌うので，歌唱指導に当るのが，今は亡き大先輩斎藤斎氏の役目に決っていて，そのユーモアにみちた指導ぶりが人気を集めていた。演奏会を終えた外苑の森は，今歌ったばかりの“Wie schönを口ずさみつつ，三三五五帰る人達の歌声でこだましたのも懐かしい想い出である。

この頃（昭和17～18年）のプログラムは東大合唱団の伝統的なドイツ・リード（リーダーシャツの曲など）が多く，必ずワン・ステージはドイツものであった。そしてオケラと合同のものを1曲ずつ加えた。ヨハン・シュトラウスの「青く美しきドナウ」シューベルトの「ミサ曲」マックス・ブルッフの「皇帝に捧ぐ」ベートーベンの歌劇フィデリオより「囚人の合唱」等がこの2年間に

上演された。伊藤武雄先生もオケ伴のこれらの曲の練習には特に力を入れて下さったので，われわれには大へん有益な勉強になった。又，戦争が拡大するにつれて，昭和18年頃には当時の軍歌を曲目に加えるようになった。山田耕筰の「燃ゆる大空」などが歌われたのもその頃である。

昭和18年も後半になって，夏を過ぎた頃から，戦局は次第に苛烈となって，わが国に不利な態勢となり，同年12月1日には法文経学徒出陣となった。このため永年続いた日本青年館に於ける定期演奏会も，18年の春を最後として，その年の秋からは会場を変更して学内の法文経25番教室で寂しく行われた。又伊藤武雄先生の指揮も同じく18年5月，日本青年館での最後の演奏会に，ベートーベンのフィデリオより「囚人の合唱」その他数曲のタクトをとられたのが偶然にも最後となっている。この昭和18年5月27日，日本青年館に於ける第37回定期演奏会こそは，東大音楽部の50年の歴史の中で，大正14年11月第10回定期演奏会以来，18年間の日本青年館時代の最後を飾る大音楽会として，永く記憶すべきものであろう。これを以て事実上の戦前の時代は終るのである。

翌19年秋には，前年秋と同様，法文経25番教室で辛じて第39回定期演奏会が行われた。これがこの年行われた東大合唱団ただ一つの演奏会であり，同時に終戦前に於ける最後の定期演奏会である。（昭和19年春は定期演奏会はなかったのである。）この年の終りには，米軍による本土空襲が始まり，翌昭和20年になると，空襲は益々激しさを加え，出陣には残った理科系(医工理農)の学生も軍需工場や病院へ勤労動員に行くことになり，授業も殆ど出来ない状態となって，ガランとした大学のキャンパスには，寂しく寒風が吹き荒んだ。――硫黄島が陥落した報道が学内に伝わり，研究室では戦局の暗い見透しについての会話がささやかれたのもこの頃である。――当然のことながら音楽部としての活動は殆ど停止した。東大合唱団は完全に崩壊してしまった。オーケストラ又然りであった。学内には歌声もなく，ただ毎日空襲を告げるサイレンのみが不気味に鳴り響いた。この中にあって，三川晋(Vn)，市橋治雄（Va)，江原望(Vc)，伊藤隆太(Pf）等の諸兄が細々と室内楽演奏を続けて，僅かに音楽部の命脈を保った。

Ⅱ．終戦後の東大合唱団の再建

私は戦時中，胸部疾患のため，学徒出陣からも，又勤労動員からも除外されたが，幸い軽症であったので毎日大学の研究室に通学していた。大学の近くまで空襲のため廃墟となって，バスも通らぬ本郷通りを歩いて大学へ来て，空襲警報が鳴ると学内の防空壕へ逃げ込むのが，その当時の日課であった。その時8月6日と9日に広島，長崎に原子爆弾が落ちて，昭和20年（1945年）8月15日終戦を迎えた。私共少数の残留学生は，その日の正午に安田講堂に集合して，教授や大学職員と共に終戦の玉音放送を聴いた。

昭和20年の秋には戦場から工場から多くの学生が続々と学園に帰って来て，荒れ果てた大学にも次第に活気が甦ってきた。各部の再建も徐々に着手され，音楽部の再建も考えなければならない時が来た。当時部室はあっても部員はなく，又予算もない実情であったから，心ばかり焦っても再建に着手出来ぬままに昭和20年という年も暮れた。

昭和21年，10数年ぶりで迎えた戦争のない平和な新春であったが，人々は寒さと飢とに苦しい毎日を送っていて，到底コーラスを楽しむ余裕などもなかった。

然しその中にあって，遂に「東大合唱団」再建の機は熟し，時は訪れた。昭和21年5月祭挙行が全学的に決定され，音楽部もこれに参加するようにとの方針が大学の最高決議として発表された。ここに於いて，私は音楽部長颯田琴次先生のお部屋をたびたびお訪ねして，オーケストラの委員の市橋治雄君と共に再建案を練った。オーケストラはワン・ステージ以上は不可能なので，代りに室内楽を加えてプログラムを埋めるというのが市橋君の意見であった。一方，東大合唱団は戦争末期に崩壊したままで1名もいないので苦慮している私を，颯田先生は励まして下さりながら一策を案じて下さった。それは当時，本郷のＹＭＣＡを本拠として，都立高校出身の東大生10名くらいの同好の士が集まって歌い続けていた「白ばら会」というコーラスを東大音楽部合唱団として誘致し，それを基幹として編成するという案であった。

私は早速ＹＭＣＡに「白ばら会」を訪ね，代表者の村上輝夫君と会って極力申し入れた処，村上君はメンバーと図った上で「白ばら会」の全員参加を快諾してくれた。この時の嬉しさは24年を経た今でも忘れられない。颯田先生にご報告にとんで行ったら，「これで東大合唱団は五月祭にやれるね。よかった。よかった。」と喜んで下さった先生の温顔が眼に浮ぶ。又学内各所に掲示した部員募集のポスターを見て参加した数名の新入部員も加えて，10数名のメンバーを確保できたので，薗田誠一先生に指揮をお願いに行き，先生のご出馬を得て4月から愈々練習に入った。音楽部室にそして東大の学園に歌声が響いたのは実に1年半ぶりのことであった。その当時のメンバーは，赤坂浩君，伊藤慎也君，入沢久仁男君，小田切敏君，加太静男君，野崎武治君，春章君，東川利

男君，宮原幸則君，村上輝夫君（アイウエオ順）等の諸兄であり，共に苦労した仲間として永久に懐かしい顔ぶれである。未だこの他にも何人かのメンバーがいたが，ここに書き漏したことをお詫びする。

又，練習回数を重ねる内に，何処からともなく伝え聞いて，ＯＢ諸兄がお仕事の合間を縫って馳せ参じて応援して下さった。「雀百まで」という例えがあるが，好きな道とはいいながら，忙しい中を歌いに来て下さる先輩に対して，１名でもメンバーのほしい時であっただけに「地獄で仏に会った」如く嬉しかった。その時の先輩諸兄は，斎藤斉氏，瀬名貞利氏，坂本吉勝氏，栗本東一氏穂坂直弘氏，秋山清氏，小寺嘉秀氏，山崎道雄氏，大沢秀行氏，菊池正一氏（年次順）等である。

かくして凡ての準備態勢は整い，４月，５月とみっちり２ケ月間の猛練習を積んで，愈々五月祭の本番の当日となった。

「1946年東大五月祭記念音楽会」

とき，昭和21年５月26日（日）

ところ，法文経25番教室

指揮：薗田誠一（合唱）

長井維理（管弦楽）

渡辺暁雄（管弦楽練習指導）

曲目（合唱）野ばら（ウエルナー）

子守歌（シューベルト）

別れ（ドイツ民謡）

花そうび（伊藤醇）

かもめ（伊藤隆太）

以上５曲で，コーラスは僅かにワン・ステージのみであったが，このたったワン・ステージがどんなに貴いものであったかは，当日ステージに乗った人々の胸に均しく刻みつけられたのである。参考までに，この日の管弦楽の曲目は，モーツァルトの「フィガロの結婚」序曲とベートーベンの交響曲第５番，それに室内楽でモーツアルトのフルート４重奏曲（２曲）があり，終りに，恒例番外の "Wie Schön"——唄声ひびく野に山に—— が戦後初めて斎藤斉氏の指導で復活した。

この日を以て「東大合唱団」は立派に再建され，所期の目的も達成して，私の任務も果されたわけである。

このあと私が担当した活動はＮＨＫの放送初出演と関東合唱連盟への参加である。特にこの放送については思い出話がある。

新生「東大合唱団」は五月祭に続いて休む間もなく，６月１日（土）ＮＨＫの「学生音楽の時間」の合唱放送に出演した。これは，折角五月祭で練習を重ねて作った上記レパートリーを只１回の本番で終らせてはもったいないと思っている処へ，丁度その頃ＮＨＫが「学生音楽の時間」という新番組を始めたので，私は早速その番組の担当プロデュサーであった牧定忠氏（後のＮＨＫ音楽部長）に頼みに行った。幸い，同氏は東大の先輩（文学部美学科）で在学中は多少音楽部にも関係されたという縁故もあって，われわれの放送出演についても好意的に配慮して，承諾して下さった。

ところが，ここで当時でなければ考えられないような大トラブルが起った。昭和20年８月の終戦以来，日本は連合軍（米英ソ中蘭）等総司令部の占領下にあったため，当時は放送内容を凡て連合軍総司令部（G. H. Q.）に予め届けて検閲を受けて許可をとる必要があった。歌曲などはその歌詩を呈出することになっていた。ところがこの放送のためにわざわざ加えたドイツ・リード "Freie Kunst"（自由の歌）の歌詩には，Über alles Deutschland（世界に冠たるドイツ）という文句があった。

申すまでもなく第２次世界大戦では，日本はドイツ及びイタリアと同盟して，いはゆる枢軸国として米英などの連合国と交戦したのであるから，米国を中心としたG. H. Q. が戦後日も浅い当時では，ドイツを礼讃するような歌を好ましく思はないのは当然である。従って，この曲は放送許可にならなかった。ＮＨＫからは他の曲に変えるようにと指示があった。ところが，われわれとしては皮肉にも，この曲だけは何としてもやりたい曲であった。それには二つの理由があった。

一つは，この曲は東大合唱団の伝統的にお得意の曲でいわゆる十八番であり，しかもこの放送のために既に充分の練習を重ねていて，その時点で他の曲に変更しても，新しい曲が時間的に練習不足に終ることは明白で，到底この曲程のよい演奏を望み得なかったこと。

又もう一つの理由としては，テンポの遅い曲が多いプログラムの中で，この曲は潑剌，颯爽とした軽快な曲であったから構成上貴重な存在であったので，削るに忍びなかったのである。そこで，その問題の個所だけ文句を変えて，この曲で押し通そうということになり，又も颯田先生のお部屋に行って，先生と智恵をしぼった。その時私がふと一つの案が頭に浮び「先生Über alles Deutschland の代りに Über alles Dicthterland（何処よりも素晴しい詩人の国）と直して歌ったら如何でしょう。」と申し上げたら，先生も即座に「これは名案，やはり窮すれば通ずだね。」とおほめに与り，喜び勇んで早速ＮＨＫに牧プロデュサーを訪ねて，この旨を申した処，「流石に東大だけあってドイツ語に強いね。大抵の大学ならこの曲をあきらめただろうに，よく粘ったね。

この歌詩ならもちろんG.H.Q.も大丈夫だよ。」とこれまたおほめに与って，予定通り放送が無事行われた逸話がある。今から考えると，終戦直後の占領下でなければ起り得ない話である。民放の未だなかったその頃，このNHK出演が東大合唱団の処女放送である。

ついで，7月4日，朝日新聞社主催の関東合唱連盟第1回合唱祭に参加して神田の共立講堂へ出演したのが，私の委員として最後の仕事となって，私は昭和21年9月に文学部を卒業し，同時に想い出多い「東大合唱団」に別れを告げた。

私の卒業後，委員は加太静男君と東川利男君にバトン・タッチされ，両君等が敏腕を振って積極的活動を続けて次第に発展し，この年の11月には関東合唱連盟コンクールに加わり，又翌昭和22年には，五所平之助監督の松竹映画「今ひとたびの」に全員出演して東大アーケード前でのロケーションの場面で歌ったりして，次第に戦前の水準を取戻し，且戦前を超える発展を遂げて，その名も「東大コール・アカデミー」と改め，昭和25年頃の空前の戦後第1次黄金時代を築いたと聞き及んでいる。

Ⅲ．結　　び

以上が私の在学中，又，委員在任中の東大合唱団の回想録であるが，戦中戦後の「苦難の道」を歩んだだけにその想い出は何時までたっても懐かしい。苦労も多かったが，それだけに思う存分やり甲斐のあったよき青春の思い出と，生涯忘れ得ぬ学生時代とを「コール」は私に与えてくれたのである。

そのような次第で「コール」に対する愛着は一入たち難く，現在の堂々たる「コール」の発展と活躍を見るのが，私の最大の喜びである。またまた本年（1970年）2月～3月にコール・アカデミーが西ドイツ及びオーストリア両国より招聘されて演奏旅行を行った際同行した東大訪欧旅行団の一員として，遙かオーストリアのグラーツの地に於いて，わが「コール・アカデミー」の堂々たる演奏を聴くことができたのは望外の幸せであった。この時の演奏はオーストリアの新聞をして，「東洋の日本の東京大学の男声合唱団コール・アカデミーが，本場のドイツ・オーストリアに殴りこみをかけて，素晴しい演奏で全聴衆を完全に魅了してしまい見事に圧倒的な大勝利をおさめた。ここに於いて，音楽の本家である西ドイツ及びオーストリア両国の大学のコーラスは唖然として顔色なし。」と絶賛激賞せしめた。私は，この時卒業後24年を経た今日，遠い外国に於いてこんなに素晴しい「コール」と一体になってこの喜びを味わい得るという幸せで胸が一杯であった。私はいつまでも「コール」を愛し，OBの一員として歌い続けたいと思う。

終りに，本年「東大音楽部50周年」そして「コール・アカデミー50周年」の記念すべき年を迎えて，幾多のOB諸兄や現役諸君と共にこのよき年を心からお慶びすると共に，今後益々その輝かしい歴史を更新されることを祈ってペンを措く。

『頑張れ！東大コール・アカデミー』

（東芝音楽工業文芸本部）

薗田誠一氏を囲んで

—座談会　昭和45年10月18日

薗田邸にて—

薗田誠一（前コール指揮者）　菊池維城（21卒）　村上輝夫（22卒）
入沢久仁男（23卒）　伊藤慎也（24卒）　野崎武治（24卒）
宮原幸則（24卒）　高田誠二（25卒）　市井善博（現役）

薗田　さなさん，お久しぶりです。

高田　先生のお声お変わりになりませんね。昔のままです。

（しばらく雑談が続く）

……

……

伊藤　そろそろ今日の議題に入らなくてもよいのですか。テレコも用意してあることだし。（笑）

市井　議題なんてものはないのですがね。こんなふうに，ざっくばらんなお話しで結構だと思います。

戦前から戦後へ

菊池　それでは，この中では一番古い私から始めましょうか。私は昭和17年から21年までおりましたから，戦前，戦後の断層にまたがっているわけです。伊藤先生から薗田先生へのバトンタッチは21年頃ですね。戦前は日本青年館で，オケと共に春，秋の年2回，演奏会をやっていました。その頃はオケといっしょでしたから，「美しき青きドナウ」や「囚人の合唱」，「シューベルトのミサ」などをオケ伴付でやったものです。19年頃は戦争も激化し，20年には活動も一時ストップしました。そして21年には五月祭が再開されることになり，音楽部も復活しようということになったのですが，オケもコーラスも惨憺たる状態で大変でした。当時の音楽部長，颯田琴次先生のところへ相談に伺い，丁度その頃でしたね，颯田先生が薗田先生にお願いされたのは。

薗田　よく覚えていませんねえ。

菊池　当時の白バラ会の助けも借りて，とにかく12～3名集ったのですが，薗田先生，いつも練習の時に，今日はこれだけですか。とおっしゃるのでね。（笑）21年にはNHKの音楽の時間にも出演しました。それ以後は，村上さんや加太さんの時代に入るわけです。

薗田　五月祭の時によく安田講堂の隣で，ビールパーティーをやってましたね。あれは記憶に残ってますよ。

菊池　卒業式の時には必ずありました。

野崎　卒業式には，新聞社から写真をとりに来るんですが，“肩を組んで歌う卒業生”なんてね。あれはみんなコールの部員だったんですよ。歌を歌ってたものだから。（笑）

伊藤　その頃は，白バラ会と二股かけていた人が多かったようですね。

宮原　そうですね。かなりお世話になったみたいね。ムシデン，ブラームスの子守歌なんか当時やりました。そしてね，その時東京の合唱祭があって，一ケ月位してから投書があったんですよ。

村上　それが，感激したというんですよ。酔える者，痴れる者とかいう書き出しでね。確かにあの時はよい出来だったです。

伊藤　最近へんなオバサンに会いましてね。僕をそれとは知らずに，僕の前で当時のコールアカデミーを激賞するんですよ。彼女も当時若かったんでしょうね。当時は，大のコールファンでね，制服のはじでもいいから一度さわってみたかったっていうんですね。（一同笑）

薗田　その頃は，部室にスタインウェイの立派なグランドピアノがあってね。部室今も変らないですか。

市井　ずいぶんよごれてますよ。ハトが巣をつくっていて。グランドピアノは今はありません。

薗田　25番教室ですか，安藤なんとかいう人の所有になるグランドピアノがあってね，重宝したものです。それが，今度の紛争でこわされたとか……。残念な事です。

入沢　あの頃は東京に音楽会場がなくて，戦争で焼けちゃったもんでね。あの頃の一流音楽家がぞくぞく来て演奏会を開いたものです。ピアノも立派だったし，部屋も大きくてね。

菊池　共立講堂でしたか，コンクールがありましたね。水夫のセレナードが課題曲で。

高田　そうですね。こんなことじゃだめですよ，負けますよ，とよく先生に言われた。（笑）

菊池　当時は私と村上さんと二人で部室に頑張ってて，栃木の人買いみたいに。（笑）宮原さんなんか，いいカモが来たなんて。いいテノールでしたからね。赤坂さんなんかも。

宮原　私は軍隊式の服を着てた。

伊藤　世界中どこを見てもテノールの多い国なんてめったにありませんからね。

菊池　今でこそ言えますが，当時はほかの大学とか，職員の中から，私もずいぶん人材をかき集めるのに苦労したものです。

コールアカデミー誕生

伊藤　そういう苦労があって，22年ごろになると，メンバーがふえましたね。

入沢　放送に出るとか，合唱祭とかいろいろ演奏会がふえたから急に人数もふえた。

市井　その頃ですね。コールアカデミーと名のったのは。

村上　あれは放送に出るために必要だというのでしたね。そう愛唱歌の時間というのです。

宮原　だれがコールアカデミーと名付けたのですかね。本郷のあそこに赤門という喫茶店ができて，そこで明日までに名前をつけなきゃいけないのでワイワイ言ってたのを覚えてます。東大合唱団じゃだめだったんですね。

伊藤　白状しますとね。あれは僕なんです。無責任にも，いろんな名前が出たんですがね，メチルアルコールとか。（一同笑）ラテン語風なのがいいということで，アカデミーと合唱を並べちゃえばいいということになったんですが，そのラテン風というのが問題でね。（笑）アカデミーコールだとか，いやアカデミックコールが本当だとか。（一同笑）

入沢　放送というのは，一般の愛唱歌の時間なんですよ。大学の合唱の方は別にあったわけです。だから一般の部に東大と名をつけて出られちゃまずいということで，放送局がチェックしたんです。それで，コールアカデミーという，何だかえたいの知れぬ合唱団が登場したんですが，その方がバカに評判がよくてね，東大合唱団はいつまでも評判がよくならなかったりして（一同笑）

伊藤　その後しばらくして，通称をそっちにしてしまおうということで，あとまで続くことになったんですね。

菊池　東大というところは融通の利かぬ官庁ですから，帝国大学音楽部合唱団という名称はくずしちゃいかんというのですよ。NHKも帝国大学はイヤというので，当時の颯田先生などの御尽力があって，やっと東大合唱団とまでくずさせたんですね。その時期がしば

らくあって，そしてコールアカデミーですね。

宮原　NHKの音楽の担当者が，薗田先生のひいきでね。薗田先生と言えば通ちゃった。

文科系と理科系

菊池　当時は，工学部と医学部の部員が多くて，法，経文などは少なかったね。

市井　今もそうですよ。僕らもオーケストラも，理科系が70％前後もいます。理科系が多いというのは何か理由があるのですかね。

薗田　それはね，文科生は他のところで芸術的なことを味わえるからじゃないかしら。理科の人というのは，いつも機械ととり組むとか，実験ばっかりやっているとか芸術的なことを発見できる機会が少ないからね。何か慰みというか，反対のものを求めるというか。

野崎　それからね，こういうこともあるんじゃないですか。理科系というのは，教授との接触がわりにあるんです。その教授がね海外なんかに行かれたりして，楽器をなさる方がわりに多いんですよ。それに刺戟されるという面もあるんじゃないですか。法，経の生徒は先生との接触が，その点少いですね。

菊池　それに関しておもしろいことがあります。今はもうなくなられた斎藤斉さん，あの方は数学が専門でしょう。どうして音楽部に理科系が多いのでしょうとたずねたことがあるんですがね。そうしたら，そりや愚問だよ，分らんかね。楽譜というのはみな数学的に勘定できるようになっているんだよ。文科系なんて，勘定できるわけがないんだよ，なんておっしゃって（一同笑）成程，名答だと思いましたよ。

高田　斎藤さん，よくそうおっしゃってましたね。

薗田　私も数学者を3，4人知ってますがね。みんなバッハが好きなんですよ。ああいう“数学的”な，わり切れるようなものね。フーガとか，ああいう几帳面なのが好きなんだな。

菊池　歴代の音楽部長を見ても，現在の松田先生はちがいますが，理科の出身の方が多いようですね。

黄金時代

伊藤　24年頃は，コールの歴史の中でも，一つの黄金時代でしたね。それも，薗田先生が実によくめんどうを見て下さったためだと今でも思っております。バランバランに勝手にどなっている奴を本当によくね。（笑）放送とともに，コンクールにも出場して，2年連続優勝してますね。声質は必ずしも美しいというものじゃなかったけれど，こまかい所にこだわらず，大きな音楽的な流れをつかめるように，先生がまとめて下さったことが成功の原因だったような気がしますね。

入沢　コンクールの課題曲の Die Nacht 楽譜通りにやっちゃ，あの感じが全然出ないんですよね。

薗田　そう，あの時はわりにうまくできて，課題曲で点をかせいだみたいね。

村上　先生が最初から半音お上げになった。“本当は調を変えちゃいけないんだけど，わかりゃしませんよ”（一同笑）

入沢　4拍休みのところ，先生どうしても短かいんで，僕らが心配して言ったら，先生“わかった，わかった”ところが本番でその箇所へ来ると，サッサッと手だけは4拍ふって，どうしても長くならなかった。（笑）

薗田　Die Nacht はね，普通通りにやるとどうしても半音上ずってゆくもんだから，いっそのこと最初から半音上げておけば，もうこれ以上上らないだろうと思ってね。（一同笑）

高田　あの時いっしょにやった兵士の合唱ね，聞いておられた近衛秀麿さんが，あれはドイツでもめったに聞かれないよ，なんて本当に。

菊池　兵士の合唱も，それに巡礼の合唱とかオペラものね，あの時の伴奏者は宮原淳子さんでしたね。宮原さんの妹さんですね。

伊藤　あの伴奏者がいないと，成り立たなかった。彼女半音上げても下げても平気だった。あれはすごい。

薗田　迫力があったね。

入沢　コンクールの時だったかな。ピアノをフルオープンしたんですね，巡礼の合唱で。

薗田　ああ，あの時ね。何かの拍子に一人多くなっちゃったのね。51名とか。それで失格しちゃったんですね。

市井　あれは有名な話ですね。（一同笑）23年の全日本コンクールの時，一位と判定されながら，一名多くて失格になったのですね。新聞の記事にあります。

入沢　あれはね，初め50名ピッタリだったんです。それで楽屋に動かないように言って待たしている間に一人無断で，ピアノを動かす手伝いに行っちゃったんです。そうして再度数えてみたら一人足りないんで，あわてて一名追加してステージに乗ったところが，さっきの人が戻って来てそのまま歌ったんですよ。もう一回数えなきゃよかったんです。（笑）

村上　判定には時間がかかったんですね。写真を現像したらしい。写真判定で失格しちゃったんです。（一同笑）

宮原　みんなコールの部員なんだからいいと思うんですがね。

高田　出来がよかっただけに，本当に残念だったな。

音質や発音など

薗田　コールも発展するに従って，音の傾向が変わってきたということがありますか。

市井　そうですね。ここ数年のことはよく分りませんが，ただ，よくほかの人がおっしゃるんですが，コールの音色はやわらかいそうですね。ピアノはきれいだけど，フォルテにどうも力がないということも言えるようです。昔もそうでしたか。

入沢　われわれの時は非常にゴツゴツでね。慶応や早稲田というのが，反対にやわらかい音質だった。

高田　僕らの頃は，旧制の寮歌みたいのこそ，男声曲だという雰囲気があって。

伊藤　とにかく歴史的にみれば，23～4年というのが一つのピークだったわけですね。評判もよかったみたいですね。ファンレターも来ました。

薗田　最近のコールの演奏会も女性が多いんじゃないですか。

入沢　あれは芸術を見に来るためじゃないんですか（一同笑）

野崎　混声に属している人も多かったから，切符もそちらのコネで，女性の方によく回ったんでしょう。コールに限らず，一般に男声合唱を聞きにくる人は，女性が多かったようですね。

菊池　薗田先生とコールは切っても切れないものでしたね。薗田ゼミでした。

伊藤　あの頃は，学校に出て来ても部室へ直行して，何やかやと暇をつぶし，またそのまま家へ帰っちゃう人も多かった。（一同笑）

入沢　クラブのおかげで，学部を超えた友人関係もできましたしね。

高田　あの頃の曲はドイツの曲が主だったんですけど，先生には発音をずいぶん教わりました。

伊藤　学校ではいわゆる読むための発音を教わったのですが，歌う方の発音は本当に薗田先生に教わったですね。

薗田　みんなどういう訳か，妙にドイツ語で歌いたかったね。

伊藤　一つは当時氾濫しつつあった英語への反発もあったんですね。

薗田　レコードで聞いてみると，例えば長いエーの発音はほとんどイーに近いね。ずいぶん日本人の発音は間違ってる。

村上　語尾のnも，何度も何度も注意された。どうしても発音しない傾向がありますからね。デンエンチョーフじゃなくてデンヌエンヌチョーフだよって。

宮原　そうそう，あれはよく覚えてる。

菊池　話はかわりますが，22年でしたか，コールが映画に出ましたね，五所平之助監督の“今ひとたび”の。あれでコールが少し外部にも名前を知られたんですよ。

入沢　あれはね，最初合唱だけいれる予定でFreie Kunst（フライエ クンスト）を歌ったんですよ。そしたらその曲がGHQでひっかかって，だめだというんで，mussidenをいれ直したんです。でも五所さんは合唱がとてもいいっていうんで，歌っている場面をどうしてもワンカット入れると言い出したんです。場所を捜したら，アーケードが音響がいいので，あすこにしようということになって，暗いからうんと照明を明るくして。

……

（久しぶりの再会のせいか，話題は尽きないようでしたが，当時のコールアカデミー関係の話が一応出尽したところで記録をうち切ることにします。（文責：市井善博））

回　　想

昭和28卒　岸田　功

「あ，岸田君じゃないか！」

昭和40年の夏，ジュネーブの日本代表部で呼び止められた。見るとコール・アカデミーの旧友，古谷綱博君である。卒業以来12年ぶりの再会だった。その夜は彼の家に招かれ，夫人の心づくしの御馳走に舌つづみを打ちながら，郵政省派遣の外交官と日本テレビのプロデューサーという立場を忘れて夜のふけるまで音楽話に花を咲かせたものだった。東大音楽部の3年間は，感受性と感受性のふれ合い—衝突—発展の3年間だったといってよい。それだけに何年たっても，多感な時代の記憶が鮮やかによみがえってくる。

合唱団ブーム

旧制水高時代から音楽部員だった私は，4月12日の入学式がすむとすぐその足で音楽部に入部申込みをした。昭和25年のことである。コール・アカデミーは総勢約120人，毎週2回の練習には常時50人から60人が集まった。この年6月の総会で私は委員（総務担当）に選ばれた。この時の委員は私の他に，

楽譜　　山口　肇（経）
渉外　　玉河　哲夫（経）

人事　　近藤淳一郎（経）
会計　　宍道　恒信（工）
の諸氏だった。

終戦後の民主化と文化欲求と性の解放が合唱団ブームを作り出した時代であった。大学制度も旧制から新制へ切り替わりつつあった。東大にも十指に余る混声合唱団が結成され，コールのメンバーもたいていどれかひとつに加入していた。部室では毎日どこかの合唱団が練習していた。総務の私は多忙だった。

フォスターのこと

民主化の嵐の中でも東大は依然として古かった。部員は旧制高校の寮歌で育って来たために“ハモる”楽しさだけで満足しているように見えた。私はリズムを入れなければコールはダメになると思った。伝統的にドイツ・リードを中心曲目としていたコールに，歯切れのよいテンポを少しでも導入したいというのが私の念願だった。私は五月祭の曲目にフォスターを採用することを主張した。それはアメリカ人の編曲による，当時としてはかなり大胆な，リズミカルなものだった。案の定，激論となり，最後は指揮の薗田誠一氏の断できまった。これが昭和26年の五月祭に突然（？）フォスターが登場したいきさつである。

安　田　講　堂

先ごろの大学紛争で安田講堂のあの見事な壁画が破壊されたと聞いて胸が痛んだ。安田講堂は音楽部のホームグラウンドだったし，コールの思い出は安田講堂抜きでは考えられないからである。毎年卒業式の日行事の終り近く，予告なしに突然流れ出す「螢の光」の男声四部合唱が，満員の二階席の父兄のハンケチをしぼらせる――それはコールの最も得意な瞬間だった。あの旧式な東大卒業式の中で，これだけは巧みな演出だった。「今年は白いものがやたらと多かったぞ」などと，ささやき合ったものだ。

26年３月，当時音楽部長だった颯田琴次教授に呼ばれ「４月１日に安田講堂で開かれる医学会総会に天皇陛下が臨席されるから君が代を歌ってほしい」と依頼された。謝礼は医学会から２万円出るという。委員協議の上，受けることとし，東大オーケストラの伴奏で天皇の前で君が代を斎唱した。天皇が東大を訪れたのも，コールが君が代を歌ったのも，戦後始めてのことだった。

六大学合唱連盟

昭和26年５月，ＮＨＫで六大学野球の応援歌特集番組を組んだことがあった。斎唱だったか合唱だったかいまは忘れたが，コールでも「ただひとつ」を何度か練習して，慶大のワグネル，早大のグリークラブとＮＨＫの第１スタジオで競演した。これがきっかけで六大学合唱連盟の構想が生まれ，私がはじめてワグネル・ソサエティーの総務だった高橋和夫君を訪れたのはこの年の９月22日だった。後のダーク・ダックスの諸君はまだワグネルに入部していなかったころだと思うが，当時のワグネルは活気があった。高橋君は私の構想に全面的に賛成してくれ，みんなに相談するということで別れた。当時すでに私はコールの委員を辞めていたので，後の事を渉外委員の高村邦彦君に託した。六大学合唱連盟が日比谷公会堂で華々しく結成の声をあげたのは翌昭和27年６月９日のことである。（日本テレビ広報部長）

コールの想い出
―15年前のコール―

昭和30卒　丹　羽　正　明

大学に入ってうれしかったことが３つあった。１つは掃除当番がなくなったこと。小学校から高校まで，毎週少くとも一度は当番が回ってきて，運の悪い時は便所の方もやらなければならなかった。こいつが私はあまり好きではなかった。大学というところは大したもんで，教室の清掃はちゃんと税金で人を雇ってやってもらうことになっていて，田舎の高校から出て来た私などはえらく感激したものだ。２つ目は，先生や諸先輩から，学問の方法を教わったこと。大学在学中の４年間に得た知識の分量などはたかが知れたもので，それよりも学問とは如何にするものかという研究の方法論を身につけさせて貰ったことが，その後どんなに役に立ったか，これはもう改めていうまでもないことだ。そして，大学生活の御利益の３番目のものは，良い友達を大勢もったことだ。餓鬼の頃からの友とはまたちがって，生活環境も専攻分野もそれぞれ異なったメンバーが集まった大学のクラブ活動での交友は啓発されるところが大きく，その意味でコールの諸兄との交りは，私にとって有難い経験だった。

私たちがコールで歌っていた頃は，戦後の物資の足りない時代がまだ続いていて，町の食堂で米の御飯を食べるためには，外食券という政府発行の切符が，そろそろ実効を失いかけてはいても，まだ通用していた，そんな時期だった。あまり豊かでない日常生活の対極として，音楽の集いに心を寄せる気持をみんなが一層強く抱いたようにも思える。

コールでは，私は楽譜係だった。たしか当時は世話役の委員が6人ぐらいいて，同級には小川安充君とか関根達也君などという有能な人たちがマネージャー格で万事うまく取りしきってくれていた。私はいわれる通りに譜面を揃える役目で，夜を徹してガリ版切りもずいぶんやったものだ。

私たちの時のコールは，技術的に決して下手ではなかったけれども，公平にみてもっと上手なコーラスはまだほかに幾つもあっただろうと思われる。それでいて，合唱コンクールを完全に軽蔑して出場しないことに決めていた。先輩たちがコンクールに優勝しながら規定の人数より人多くて失格したなどという伝説を聞かされもしたが，合唱の目的はコンクールなどにはない，とか勇ましいことをいって，出場しないことに誇りをもっていた。その代り自主公演に力を入れようというので，定期演奏のほかに，名古屋大，京都大，立命館大と組んで四大学の合同演奏会を実現させたりしたものだ。その一環として，関西へ演奏旅行に出掛けたことも，コールの楽しい想い出の一つである。

演奏旅行といえば聞こえはいいが，われわれの懐具合からすると，安くあげることが至上命令ときているから，汽車はもちろん夜行の鈍行で，払う運賃が安い割りには長時間乗せて貰える効率の良い列車を選ぶ。泊る所は，名古屋で，駅裏の得体の知れぬ木賃宿にザコ寝同然に泊ったのが，まだ旅館と名のつくだけ良かった方で，京都では，12月の寒いさなかに，寮生が帰省して空になっている京大の寮の大広間みたいなところへ，夜露をしのがせて貰ったのであった。そこは，たしか一泊二食付きで100円という超好意的な料金だったように記憶している。その代りといってはなんだけれど，朝飯のおかずときたら，大根ばかり。大根の味噌汁に大根おろし，大根の煮つけが並び，その上ご丁寧にも，大根を原料とするところの沢庵漬が添えられてあって，びっくりすることひとしきりであった。びっくりしたといえば，その日の昼にもう一度驚いた。昼食を同志社大の食堂で御馳走になるというので，みんな期待に腹を減らしていた。結構なランチがのっているテーブルに席を占め，いざパクつこうとした途端，同席した同志社大の諸兄姉たちがなにやら食前のお祈りを唱え始めたのである。慌てて皿から手をひっこめる者，口にパンをほおばったままじっと噛み殺している者，関東の武骨者どもはそこで大きに恥をかいたのが忘れられない。

演奏会は夜なので，昼間は思い思いに京都の町を見物して歩いた。寝る前になると，その日見てきたことの報告をし合うのだったが，ここでも食い物の話ばかりしていた。苔寺に行ってきたグループが，苔の月と称するトロロそばがうまかったと，こと細かに説明してくれるのはいいが，肝心の景色の方がどうだったのか，さっぱり要領を得ない。それではというので，翌日，自分で行ってみて，やっぱりそばを食って帰ってきた。

どうも意地の汚い話ばかりで相済まぬ次第だが，貧乏旅行もそれなりに楽しかった。コールの想い出には，豪勢なのがあまりなくて，困苦欠乏に耐えた話ならたくさんある。やっぱりまだ世間が貧しかったせいなのだろうが，それだけに，毎週火・金曜日の練習日にはすべてを音楽に打ち込む充実した時間を，より純粋に求めることができた。物はなかったが，精神の自由はまだ十分にあったし，世の中は今ほど悪くはなかったように思うのである。（音楽評論家）

1965年の想い出

昭和42卒　武　田　智　雄

音楽部の創立50周年の記念誌に，ＣＨＯＲの若手ＯＢとして何か一言との現役部員よりの通知を受け，回顧録を書く程年をとったとも思われないのですが，ともかく思い出すままに書かせて頂く事にします。

私は，就職してからも本郷の下宿を出ず，昨年7月に引越す迄，何かと，現役部員と顔を合わせる機会が多かったのですが，住居が少し遠くなって，遂に腐れ縁が切れるかと思いきや，今年の4月より1年間，毎週一日，本郷の出身研究室に通う身分となって，またまた現役諸君と顔を合わせる機会が増し，やはり縁は切れそうにもありません。

私達は，1965年の第12回定期演奏会を担当したので，もう5年の年月が経た訳ですが，今振返ってみて，感じるのは，現在時折顔を合わせて食事等する同期生と，現役時代，役員会で真剣になって喧嘩のような議論（論争のような喧嘩？）を，度々行なったという事です。それだけ各担当者が自分の責任を果す事を真剣に考えていたのだと思うのですが，会議で他人と対立することを恐れるのあまり，自己の主張を押えて，その結果不満が蓄積されるという事がなく，自己を充分主張していたと思います。そして会議のような喧嘩（？）が終った後，全員で喫茶店へ行って談笑したのも学生時代の良き想い出です。

私は，65年度の学生指揮者を担当したのですが，技術系役員会議での年間目標を1年間でほぼ果す事が出来た

と思っています。

一言で要約してしまうと，当時コールに存在した2つの性格のグループ（即ち，課外活動として合唱音楽を追求するものと，合唱を手段とした寄合世帯を求めるもの）があるが，音楽部コールアカデミーとしては，前者に性格の統一を目指すべきであり，そのためには部員が半減するも止むを得ないが，われわれの主旨を理解してもらえるよう努力しながら前者の性格に統一する，という事でした。

具体的には，例えば毎年空文化していた「練習中の私語の禁止」を実現させ（私語を誘発する役員間の事務上の話も室外でする等の徹底。）その結果としては，全体の会議で『遅刻者の靴音は集中している神経を邪魔するから，休憩時間以外に入室する場合，足音を立てないように』という意見が，先輩部員から出た位，練習時間中，全員が集中するようになった事。全員の集中した雰囲気を崩さないよう，充分な注意を払った事ももちろんです。

また，練習時間の開始についても，以前は『職権の侵害』とかで，学指揮が，授業等の都合で遅れた場合等，練習が始まらず，定時に集まる者は一割位で，厳密には他は総て遅刻であったが，65年度は会場予約の手違いから他団と重複してしまった結果，開始が遅れた1回を除いて，年度を通して定刻に開始，結果的には出席率が上昇した。

ともかく練習中に歌わず，少年マンガを読んだり，学指揮の注意が私語で聞き取れず，遂には『もう少し，静かにしてくれ！』と学指揮が怒鳴らざるを得なかったサークルを短期間で，『その日，練習に参加した事に，各人が満足して帰れるような練習』が出来るように，諸計画の立案，決定，実施，検討，修正等を行なった。しかし再三の説得にもかかわらず，退部した者や何の連絡も無く消失した部員が数名いた事は，（例年の退部数と比べて取り立てて多い人数ではないが。）現在に至ってなお彼等の協力を求める事に成功する手段が全く無かったかと考える位です。それ程当時のサークル像に技術系として，過大自信を持っていました。

事実，定演を聴きに来て『こんなに良い演奏とは想像できなかった。退部しなければ良かった。』と言って，実際に泣いた者や，感激して終了後，泣き出した部員等，技術系の音楽的技術という事では無く，サークル全員が，練習時に真剣に取組む事ができた，その雰囲気と信頼関係を作れた結果が，演奏会で表現されたのだと解釈して，われわれは大いに満足し，3年の定演で出た14名の内，11名が4年になってもコールに協力して定演に出る事が出来た事にも満足している次第です。

合唱団で『多数の構成員のうち，自分一人の存在なんか』と，一度でも考えた事がある人は，少しく間違っていると思います。また逆に全員が参画意識を強く持って充分に満足な練習をする事は，コールの中心となる学年に課されている至難の課題とも考えられます。拘束される練習時間，役員の怠慢から3分の無駄時間を生じたとすれば，100名全体では延べ5時間の時間の浪費となるとわれわれは考えて練習効率の向上と一見逆に見える充分なる休憩，自由時間の確保に努め，伴奏楽器の助けを借りない全ステージ無伴奏（但し専属伴奏者に失礼にならないよう，学指揮ステージに一曲だけ伴奏をつけた。）の定期演奏会でわれわれは一年間の活動の結果をぶつける事が出来た満足感をもって卒業はしたものの，就職してからは，個人的にはコールの演奏会を時折，聴く他は全く音楽とは縁の無い生活をしています。

学生時代の余暇を有効に利用しておられる現役諸君がコールの良い伝統を継承されて，真の音楽に向って練習活動を続けられん事を願って拙文を終らせて頂きます。

（日本ＩＢＭ）

＜特別寄稿＞

音楽部創立50周年祝賀会に出席して

現コールアカデミー常任指揮者
前田幸市郎

去る12月6日東京大学音楽部創立50周年の祝賀会が催され，私も御招きをうける光栄に浴したばかりでなく，思いがけずも感謝状を頂き大変に感激いたしました。

祝賀会の席上で諸先輩の方々から発足当時の御苦労のお話を伺いましたが，その当時音楽部を創立された方々の知性と勇気はさすが東大の先輩方であると思いました。

そして50年もの間，年々の部員に受けつがれて現在に至っているのですが，ひとつの事が50年もの間継続し存在し続けているという事はなんと素晴しい事でしょう。

私はこうした東京大学音楽部コール・アカデミーと共に17年歩んで来ましたが，この輝かしい歴史のある音楽部に対しあらためて責任を感じ，微力ながら今後も出来る限りの事をせねばならないと思いました。

以上はコール・アカデミーと共にある私の偽らざる心境でありますが音楽を専門とする私個人の立場からは又

別の色々なことを当日思い考えさせられました。

50年という年限はたしかに音楽部にとっては長い年月であります，然し西洋音楽の歴史から見たならば，ごく僅かな期間でしかありません。また今から50年前，即ち1921年ということになりますが，西洋音楽史的に考えたならばどんな時期であるか，ヨーロッパではどんな状態であったかと思うと当時の創立の御苦労，そしてそれが当時の日本の音楽界の草分けであり，開拓者でもあったということはいかに日本の音楽界は幼なく立ち遅れていたか，そして歴史が浅いかという事です。それだけに発足の御苦労は貴重なものでありましたし大変なものであった事もよくわかる気がしました。これを思い，ひる返って現在の日本の音楽の状態を眺めるとき，この僅か50年の間の進歩発展は目覚しく驚くべきものだと思います。これは日本民族がいかに勝れているか，そして我々の先輩がいかに努力をされたかということですが，正に驚異的な進歩だと思います。

然し又この短期間になされた異常発達の蔭には本場のヨーロッパには見られないひずみが生じている事も我々は見逃すことが出来ません。そして50年——半世紀のうちに日本の音楽は此所迄驚異的進歩発展をしたのですからこれからはこの「ひずみ」を是正してゆく段階なのではないだろうか，このことはこの数年来私は感じて来た事でしたが，今回の８カ月のヨーロッパ生活に於てはっきりと考えさせられました。このことに就いては簡単には言えませんが勿論私一人で出来る事でもなく我々一代で出来る事でもないと思います。然しやってゆかねばならないことだと思います。

50周年の祝賀会に於て心から50周年を祝すと共に，もう一人の私は諸先輩のお話を伺い乍らこんな事も考えていました。